

宗教との付き合い方

一の良津帯

ナイス・エイジングのすすめ

虚空

ポイント

- ① 宗教の根幹には深い畏れの感情がある
- ② 私にとって畏怖心の対象は聖なる虚空
- ③ 聖なるものへの畏怖心を持つのは悪くない

人生も後半になると、信仰心がない人も宗教のことが少し気になってくるものです。やはり自分の死が近くからでしょうか。

私自身は宗教に対してあまりいいイメージを持っていません。それは宗教には教団が付き物だという感じがあるからです。広辞苑で「宗教」を引いてみても、「帰依者は精神的共同社会（教団）を営む」というくだけた言い方、「多くは教祖・經典・教義・典札などを何らかの形で持つ」と書かれています。

せ、小中学校時代は運動会や学芸会が嫌いでしたし、今は宴会やパーティーが苦手です。

しかし、宗教のそういう面が本質ではないということも感じています。宗教学者の鎌田東二さんは著書『宗教と霊性』（角川選書）

の中で宗教とは何かを語っています。それによると、宗教とは明治時代に religion を翻訳した言葉で、この religion（ラテン語の religio が由来）の語源には三つの説があるそうです。

一つ目は神話や儀礼や祈りを反復するという意味、二つ目は神と人とを再び結びつけるという意味。そして三つ目は根源的な畏怖心という意味だということです。

聖なるものや不可思議な事物に直面したときの深い畏れの感情が religion の語源だということです。鎌田さんはこの3番目の説を支持して、それこそが「宗教」「宗教心」の根幹にあるものだと言っています。

私もこの「根源的な畏怖心」という言葉は腑に落ちます。私も聖なるものに対する畏れの感情を持っているからです。その感情が宗教の根幹なら、私もひとかどの宗教者だといえます。

私にとって聖なるものは虚空です。一切の事物を包容してその存在を妨げない偉大な空間のことです。その虚空の存在を感じるようになったのは、以前にも書きましたが（6月28日号）、30年前に中国・内モンゴル

で、虚空を感じ、私が死んだら帰っていく世界がここにあると直観したので。それ以前にも、病院で亡くなった患者さんを見送るたびに不思議に感じることもありました。どの患者さんも例外なく死後、本当にいい顔になるのです。それはまさに、現世から解放されて、大いなる虚空に旅立つときの安堵の表情だったのだと気づきました。

臨済宗の中興の祖、白隠禪師も法語『夜船閑話』の中で虚空について語っています。「虚空に先だちて死せず、虚空に後れて生ぜざる」を目指せということです。つまりは、生きながら虚空と一体になれるということです。まさにそれが悟りの境地ということでしょう。私にそれは無理ですが、畏怖心を持って虚空と交流しようと思っ

ています。宗教への信仰心は別として、聖なるものへの畏怖心を持つのはナイス・エイジングの方法として悪くないと思うのです。

自治区のホロンバイル大草原の真ただ中に立ったときからです。空の青、雲の白、草の緑にひとり包ま

おびつ・りょういち 1936年生まれ。東京大学医学部卒。帯津三敬病院名誉院長。西洋医学だけでなく、さまざまな療法でがん立ち向かい、人間をまるごととらえるホリスティック医学を提唱。『貝原益軒 養生訓 最後まで生きる極意』（朝日新聞出版）など多数の著書がある